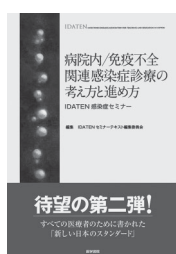


書評

[評者]
松村正巳

金沢大医学教育研究センター
リウマチ・膠原病内科



病院内/免疫不全関連感染症診療 の考え方と進め方

IDATEN 感染症セミナー

IDATEN セミナーテキスト編集委員会 編

B5判 頁328

定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01244-7]医学書院刊

IDATEN (Infectious Diseases Association for Teaching and Education in Nippon) こと日本感染症教育研究会から『病院内/免疫不全関連感染症診療の考え方と進め方』が出版された。待ち望まれた内容が記述・編集され、時宜を得た出版である。

医学の進歩は著しく、この四半世紀を検証しても、特に治療における恩恵には目をみはるものがある。腫瘍性疾患、自己免疫性疾患、移植医療、クリティカルケアにおいて、以前には想像もできなかった病態の改善が得られている。しかし、この恩恵の背後には、時に想定していなかった新たな病態が潜んでいることがある。新薬の副作用、そして感染症、特に病院内/免疫不全関連感染症である。これは医学の進歩に常につきまとう普遍的な現象ともいえよう。

病院内/免疫不全関連感染症は、経験のある医師にとっても手強い相手である。なぜだろう。病院内感染症は本来起こるべきでない病態であり、時に想定外の事件として突然に訪れる。基本的なアプローチが理解され、実施されないと正しい診断・治療が難しい。免疫不全関連感染症が大きな障壁となり、われわれの前に立ちはだかる理由は、診断が容易でないこと、エンピリックに治療を開始せざるを得ないこと、治療薬の副作用が多く、時に重篤ですらあることによる。確定

診断のために気管支鏡などの侵襲的な検査を要することがある。診断に至らないこともまれではなく、薬剤の副作用が発現したときに、それを承知で最善の治療を継続できるかという重い課題を背負う。初学者の目には、道筋が見えない難題として映り、経験を積んだ医師にとってもストレスがかかる。

本書ではこれらの困難な課題に対し、極めて系統的なアプローチが示される。「内科病棟での発熱へのアプローチ」「肝硬変患者の発熱へのアプローチ」「免疫不全者の肺感染症へのアプローチ」など、われわれが日々遭遇する具体例が呈示され、おのおのへの対応が記述される。そして、読み進むうちに各論の根底を貫く法則に気付く。それは、①患者背景、②感染臓器、③原因微生物、④抗菌薬、⑤最終的な治療方針という感染症診療の基本原則である。彷徨しているときは、実はこの基本原則に沿っていないことが少なくない。

病院内/免疫不全関連感染症診療は、もはや三次医療機関に限られたものではない。プライマリケアにおいても経験される。繰り返すが、病院内/免疫不全関連感染症は手強い。時の経過とともに病態の解釈・治療の変遷も観察されてきた。本書が多くの医療者にとって、現時点における最善の指南書となり、病を患う人の守護神になることを願う。